

---

# IS 裏方の赤い人

ネコ削ぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 裏方の赤い人

### 【Nコード】

N1290Y

### 【作者名】

ネコ削ぎ

### 【あらすじ】

世界をまたいで願いをかなえるなんて出来ませんよ。代わりに私の居る世界の人達の願いをかなえてあげましょう。色々なところにありますから声をかけてください。願いをかなえたら退散しますから。ちなみに目印は赤色ですから。

注意……この作品はいまだに迷走中で執筆したので、場合によっては更新されない可能性があります。

## いつして皆が壊れてく(前書き)

場合によっては更新されないかもしれません。評価+個人的な気持ちでがんばりますが。

こっぴどく皆が壊れてく

ぼく達はとても仲が良かった。

とてもとても仲が良かった。

本当に仲が良かった。

仲が良かったんだ。

だからだろう。

今日も仲良く遊んだんだから、明日も今日と変わらず仲良く遊ぶんだらうと。

当たり前のように、疑問などある訳もなくそう思った。

実際に明日も、そのまた明日も仲良く遊んだ。

当たり前のように、明日もそうなることを疑わずに。

「トーカー、簿。行こうぜ」

そう言つて目の前で……ぼくが轢かれた。

こっ、ポーンと。

本当はもっと鈍い音が響き渡った気がする。

世界が止まったような錯覚を覚えた。周りの人達はちゃんと動いていたが。

けたたましい悲鳴がぼくの耳に飛び込んできた。

隣にいた友達にも聞こえたのか驚いて尻餅をついて、泣き出してしまふ。

視線の先にある動かなくなった人を見て、ぼくは半身を失つたのだと分かった。

夏のある日のことだった。

織斑十夏は双子の兄である織斑一夏を目の前で亡くした。飲酒運転

の軽自動車に轢かれた。一夏の体重を感じさせないくらい簡単に。病院で制服姿のまま、お姉ちゃんはショックで崩れ落ちた。後は淡々と進んだ。何があったのか分からないほど淡々に。全てが終わった後なのに、ぼくの家は暗かった。何日も何日も。天気が良くても暗かった。

ぼくもお姉ちゃんも学校を休んで家にいたので、その暗さがぼく達二人が原因だと気づくのはそう遅くなかった。

このまま家にいるのが辛くなって家を出て、近くの公園ですっと時間を潰していた。

どうすればお姉ちゃんが笑顔になるのか？ 一夏が戻ってくれば笑顔になるのか？

同じことを延々と考えて、ふと顔を上げると赤色が目の前に広がっていた。

赤色はぼくの目線に合わせるためにしゃがみこんで微笑む。

……赤い女の人だ。

首が隠れる程度に伸ばされた髪は真っ赤。ぼくを見つめるその瞳も赤い。日本人ではない褐色の肌。修道服を着ているが、それも赤色。そんな赤い人はぼくを穴が開くほど見つめている。ぼくはどうすれば良いのか分からず固まってしまった。

「君さ……」

沈黙を破ったのは赤い人だった。

「何か困ったことあるでしょう？」

何処までも明るいと思える声色。

ぼくを家の暗さとは大違いだ。

赤い人の声に、ぼくは事故で一夏を亡くしたことを話した。全て話し終えても、赤い人は微笑んだままだった。

「私さ、その一夏くんを生き返らすことが出来るって言ったらどうするかな？」

明らかに嘘をついているだろう。死んだ人を生き返らすことなんて出来るはずがないんだから。

ぼくの目が胡散臭いものを見る目だと気が付いたのか、赤い人はクスツと笑う。まあ、信じないよねと言いながら。

「でもね、私は人の願いをかなえることが出来る魔法使いだから。実は出来ちゃうんだよなー」

魔法使いと言う言葉でぼくが納得すると思っっているのだろうか？ぼくが納得していないのを知っているか分からないが、赤い人は公園内に植えてある枯れた桜の木に向かっていった。その木の前にたどり着くと、両の手のひらをくつつける。

「枯れ木に花を咲かせましょう」

その言葉が発せられると、木は応えるように桜の花を咲かせ始めた。あり得ない光景にまるで花咲爺さんみたいだと思ってしまった。そして、本当に魔法使いだとも思った。

「凄いでしょ。信じる気になった？」

咲き誇る桜の木から離れて戻ってきた赤い人は変わらず微笑みを浮かべていた。

季節はずれの桜の存在に、ぼくは赤い人が本当に願いをかなえてく

れると信じた。

「本当に一夏を生き返らしてくれるの？」

もしぼくが大人なら手品か何かだと鼻で笑い信じなかつただろう。子供だから信じてしまった。

「ふふふ。やってあげましょう。その代わり」

「その代わり？」

「きみの命を貰うけど良いかな？」

え？

「一人の人間を生き返らせるんだから、これくらいの対価は貰わなくちゃね」

ぼくのいのち？

「ただで願いをかなえてくれると思った？ だとしたら甘い。ちゃんと対価はいただきますよ。その証拠にさ」

赤い人が先ほどの桜を指差す。

少し前まで咲き誇っていた桜が見る見る内に花びらがなくなっていく、枯れていく。

「すぐに咲かせてあげたから、すぐに枯れてもらったんだ。きみの場合は一夏くんを生き返らせる代わりに、きみの命をいただくってことで……どうする？」

ぼくの回答を赤い人はずっと微笑んで待っていた。  
初めて、笑顔が怖いと感じた。とても怖いのだと。

気づいたらぼくは赤い人から逃げ出していた。

こっぴどして皆が壊れてく 2

目の前には鏡がある。とても大きな鏡。ぼくの体が全部映るほどの鏡だ。

ぼくが手を上げれば、鏡に映るぼくも同じタイミングで手を上げる。笑えば笑う。怒れば怒る。泣けば泣く。

面白いと思えるほどに一緒に動く。

まるで双子みたいだ。

……双子？

ぼくは一夏と双子。見た目は同じ。初めて見た人はどっちがどっちか分からないほどに。

鏡に映るぼくは相変わらずぼくと同じ動きをする。

自分の動きを映し出す鏡に飽きてきた頃、不思議なことが起こった。ぼくが何の動作をしていないのに、鏡に映るぼくが急に泣き出したのだ。

ゾツとしてしまった。

しばらく泣いたぼくは、今度は口をパクパク動かし始めた。音が聞こえず何を言っているのかはまったく理解が出来ない。

パクパクパクパク。

パクパクパクパク。

鏡に映るぼくは一体何を伝えようとしているんだろう？

「何を言いたいの？」

言って後悔する。鏡に語りかけるなんて変だ。いくら鏡に映るぼくが勝手に動くからといって、話し合えることはないんだ。ぼくは鏡に背を向けて立ち去ろうとする。

「...ど...いき...」

何処かから途切れ途切れの声が聞こえてくる。聞いたことのある声だ。

「ど...し...いき...なかった...」

先ほどより言葉を聞き取ることが出来た。何処から聞こえてくるかも。

目の前の鏡だ。鏡に映るぼくが喋っているんだ。

「どうして、俺を生き返らせてくれなかったんだよ」

聞いたことのある声。ぼくの声だ。同時に一夏の声である。鏡に映る人物もぼくであって一夏でもある。

「どうして、願いをかなえてもらわなかったんだよ？」

一夏がぼくに語りかけてくる。あの日、ぼくが赤い人から逃げ出したのを責めてくる。

「かなえてもらおうとしたよ...！」

かなえてもらおうとしたんだ。でも、代わりにぼくの命を貰うなんて言ってきたんだ。

「違う。逃げたんだよ、お前は。家族の俺を見捨てたんだ。千冬姉が泣いているのを止めようとしなかったんだ。トーカ、お前が自分の命をあげていれば俺も千冬姉も笑うことが出来るんだぞ」

ぼくは一夏を見捨てた訳じゃない！！ 千冬お姉ちゃんが泣いているのを止めようとした！！

「なら、生き返らせる。命を渡すんだ」

今度こそ鏡に背を向けて逃げようとする。

しかし、振り向いた先にはぼくを、一夏を映し出す鏡が存在した。右を見ても、左を見ても、上を見ても下を見ても、ぼくを映し出す鏡があった。

「生き返らせる生き返らせる生き返らせる生き返らせるイキ返らせロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロ」

ぼくを囲む全ての鏡から際限もなく声が聞こえてくる。ぼくを責めるように。

騒音に混じり、すすり泣く音も聞こえ始めた。

助けて、助けてください！！

ぼくの叫びは騒音の中に空しく消えていった。

助けて！！ 助けて！！ 助けて！！

何度も何度も叫ぶ。鏡に映る一夏から逃げ出したくて。

目を開ければ見慣れた空間にいた。ぼくと一夏に与えられた部屋だ。なんてことのないぼく達の部屋。空間を彩る装飾品の類も年相応の玩具もない質素な部屋。

そんな部屋の片隅でぼくは眠りから目覚めたんだ。

換気のなされていない部屋は淀んだ空気に満ちていて、具合が悪くなりそうだ。

開けられていないカーテンが昼夜を問わずぼくを外の世界から遮断してくれる。

そのカーテンに日の光が当たっているから、まだ夜じゃないんだ。みんな学校で何をしているんだろう？

最近、学校に行っていないから今何を学んでいるかも分からない。

箒ちゃんがプリントを持ってきてくれるけど、目を通したことがないからそこから何を学んでいるかも分からない。

赤い人から逃げ出した日から、ぼくは学校を休みがちになった。

周りがぼくを責めている気がするんだ。

どうして、一夏を生き返らせなかったんだって。

クラスみんなと親しかった一夏の代わりにぼくが死ねば良かったんだって。

気づけば少しずつ登校を拒否するようになって、最終的に引きこもってしまった。

一日中自室で睡眠をとる毎日。寝れば夢を見て、それで目を覚ます。十分な睡眠がとれていないのでまた寝て、また目を覚ますの繰り返し。

。しんせうせい。きんせうせい。

### じつして皆が壊れてく 3

起きては寝て、起きては寝て。

寝れば嫌な夢を見ることは明白なのに。

でも学校に行こうとは思わない。

行けばみんなが責めてくるから。

直接責められたことはないけど、きっとみんなはぼくを責める。

起きてすぐに寝てまたすぐ起きる。

長く起きているのはお腹が減った時とトイレに行く時。

まだそんなに経った訳じゃないのに、お姉ちゃんの顔が思い出せなくなつた。名前は思い出せるのに。織斑千冬と言う名前だと。

……どうでも良いか。

そういえば、いまだに篝ちゃんがプリントを届けてくれるらしい。少し嬉しいけど、それで嫌な夢を見なくなるわけじゃないから。

……どうでも良いか。寝よう。

……また起きる。

時計を見るとまだ一時間しか経ってない。

やっぱり変わらず嫌な夢だ。

どうにかしてあんな夢を見なくてすむ方法はないのかな？ もしくはいちいち夢に脅えない様にならないかな。

段々と涼しくなってきた。寝汗をあまりかかなくなってきたので起きた時の不快感が一つ減つた。

世の中は夏から秋に変わったんだろう。

ぼくはずっと一夏に囚われてるのに。  
どうにかならないのかな？

……どうでも良いか。寝よう。

……また起きる。

時計を見るとまだ一時間しか経っていない。  
何度見ても嫌な夢だ。

いい加減にこの夢を見なくてすめば良いのに。

高い所から飛び降りればもう夢を見ないですむのかな？ それとも  
永遠に夢を見続ける結果になるのかな？

そういえば最近、家から気配がなくなってきた。お姉ちゃんが帰  
ってくるのが遅くなった気がする。

……どうでも良いか。寝よう。

……また起きる。

時計を見るとまだ一時間しか経っていない。

もう……こんな夢は嫌だ。

いい加減にいい加減にいい加減にしてほしい。もう過ぎたことなん  
だ。いつまでも夢に出てきて。そういうふうになっちゃったんだか  
ら。諦めてよ。ぼくも酷い目にあっているんだから。

ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああ！

……どうでも良いか。寝るしかないんだから。

……また起きる。

暖かい何かがぼくの頭を撫でてる。優しい手つきだと思う。確実にお姉ちゃんの手じゃない。だって、お姉ちゃんは現実でも夢の中でもぼくを助けてはくれないから。

だったらこの手は誰だろう？

パチッと目を開けると、視界一杯に赤色が飛び込んできた。

「おはよう。不法侵入については勘弁してね」

あの時、公園で出会った赤い人がぼくの顔を覗き込みながら頭を撫でていた。

久しぶりに見たけど赤い。

あかあかあか、全てが赤い。

赤い髪に赤い瞳、赤い修道服。肌は褐色で日本人ではないだろう。

「……なんで？」

無意識の内に出てきた言葉。

「なんで？ ああ、それはね。きみの願いをかなえてあげるために来たんだよ」

願いをかなえる？ また一夏を生き返らせる願いを。

「かなえてほしい願いを言ってごらん。限界はあるけど、私のかなえられる願いなら一つだけかなえてあげるよ」

とても明るい笑顔をぼくに向けてくる赤い人の声も相変わらず明る

いものだった。

怖いと思うけど、同時に嬉しくも思う。

まだ、ぼくを気にかけてくれる人がいるんだ。

「なんでも良いの？」

「夏のことじゃなくても？」

「なんでも良いよ」

「なんでも良いの？」

「なんでも良いよ」

「じゃあ……」

この願いをかなえてほしい。もう嫌だから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1290y/>

---

IS 裏方の赤い人

2011年11月5日01時06分発行